

令和4年度(第73回)芸術選奨  
選考経過

## 令和4年度(第73回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	<p>演劇部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として10名、文部科学大臣新人賞候補者として19名の推薦があった。第一次選考審査会では、文部科学大臣賞に古典から現代まで5名、文部科学大臣新人賞に同じく4名の候補を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、各選考審査員が推薦理由と共に、他の候補者への意見を述べる形で、様々な角度から議論を重ねた。候補者の業績の積み重ね、令和4年の成果、年齢等を吟味した結果、文部科学大臣賞には、「セールスマンの死」ほかの成果で自在な演技が高く評価された段田安則氏と、「義経千本桜」の3役をはじめとする成果で、時代物、世話物、舞踊それぞれに進境を示した尾上菊之助氏を選出した。</p> <p>文部科学大臣新人賞には、主役に限らず、脇役としての卓抜した技量も高く評価して、「あつい胸さわぎ」ほかの成果によって枝元萌氏を選出した。</p>
映画	<p>選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として15名、文部科学大臣新人賞候補者として11名が推薦された。選考審査員は文部科学大臣賞候補者7名、文部科学大臣新人賞候補者5名を最終候補として、再度検討して第二次選考審査会に臨んだ。</p> <p>文部科学大臣賞は監督・俳優・スタッフそれぞれの部門の候補者について検討を重ねた。その結果、「キングダム2 遥かなる大地へ」で素材から探し求めて役柄にふさわしい衣装を作り上げる作業の緻密さと、大作を支える力量への評価から宮本まさ江氏を推す声が強まった。続いて「シン・ウルトラマン」ほかに見る突出した視覚効果の表現で今日の日本映画を支える尾上克郎氏を推す声の方が勝り、スタッフ2名が選出された。選考審査員はスタッフ部門から2名選出されることは芸術選奨の対象の幅広さを示し、映画界の発展に繋(つな)がる好ましい結果と判断した。文部科学大臣新人賞は意見が割れて議論を繰り返した結果、劇場用映画の実績としては一本目だが、作品実現に至るまでの年月に積み重ねた真摯な創作姿勢が評価出来るとした上で、今後の活動を支援したいという意見が賛同を集め、早川千絵氏を選出した。</p>
音楽	<p>令和4年度は、コロナ禍による公演制限が多少緩和されたこともあり、昨年に比べると多くの公演が開催され、久しぶりの聴衆を前にした演奏に音楽家たちも熱のこもった演唱を繰り返した。選考審査員及び推薦委員からは、文部科学大臣賞候補として14名、また文部科学大臣新人賞候補として10名の推薦があった。第一次選考審査会においては、各委員から提出された推薦理由を精査、検討するとともに、忌憚(たん)のない活発な議論がなされた結果、文部科学大臣賞では5名が、文部科学大臣新人賞では4名が第二次選考審査会の議論に委ねられることになった。第二次選考審査会でも、審査会間に重ねられた調査や精査に基づく各選考審査員の踏み込んだ意見表明は非常に活発で、伯仲した議論が交わされた。特に文部科学大臣新人賞では、年齢のことも含め、新人というものの概念についても様々な見解が表明され、慎重に検討が重ねられた。その結果、メシアン没後30年を期して催された「メシアン・プロジェクト2022」に示された、世界有数といっても良い説得力豊かな圧倒的成果により、メシアンをライフワークとするピアニストの児玉桃氏と、「山登松和の会」ほかにおける、山田流ならではの力強く華やかな箏(こと)の演奏や、深い味わいに満ちた安定感のある表現力が高く評価された山田流箏(そう)曲演奏家の山登松和氏の2名が文部科学大臣賞に選ばれた。また我が国でこれまで人材の乏しかったロッシェニ演奏などに新生面を開いている指揮者の園田隆一郎氏が文部科学大臣新人賞に選ばれた。</p>
舞踊	<p>舞踊部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として16名、文部科学大臣新人賞候補者として15名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名に候補者を絞り込んだ。ただし、文部科学大臣新人賞5名の内、2名は文部科学大臣賞としても推薦があった候補者であった。文部科学大臣賞の内訳は、琉(りゅう)球舞踊家1名、バレエダンサー2名、日本舞踊家1名。文部科学大臣新人賞は、バレエダンサー3名、舞踏家1名、日本舞踊家1名であった。</p> <p>第二次選考審査会では、まず文部科学大臣賞の候補者4名につき比較検討、慎重に審議した結果、琉(りゅう)球舞踊家の志田真木氏ならびにバレエダンサーの福岡雄大氏の2名を選出することになった。志田氏、福岡氏ともに、洗練された古典舞踊での高い境地とともに、創作面での意欲的な成果が評価されたものであった。</p> <p>文部科学大臣新人賞でも、当初選考審査員の評価は複数の候補者に割れたが、議論を尽くした結果、「舞踏 天狗藝術論」の成果が評価された舞踏家の田村一行氏が選出されることになった。</p>

## 令和4年度(第73回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
文学	<p>文学部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として12名、文部科学大臣新人賞候補者として11名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は6名、文部科学大臣新人賞は3名に候補者が絞られた。</p> <p>第二次選考審査会で討議の結果、ほぼ全員の賛同を得て、次の受賞者が決まった。</p> <p>文部科学大臣賞には、滝口悠生氏、渡辺松男氏が選ばれた。滝口氏の「水平線」は、かつての激戦地・硫黄島に生きた人々と、その孫たちとの時空を超えた交流を描く。人称・視点が自在に転換する技法も高く評価された。</p> <p>渡辺氏の歌集「牧野植物園」は、奇想ともいえる独自の身体感覚と、人間中心主義を疑う深い思索とが、スケールの大きな自然の表現を生み出したところに、注目が集まった。</p> <p>文部科学大臣新人賞には、九段理江氏の「Schoolgirl」が選ばれた。理解し得ない母娘の關係に、太宰治「女生徒」が新しい時間をもたらすという斬新な発想の意欲作である。</p>
美術	<p>美術部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者19名と文部科学大臣新人賞候補者18名が推薦された。第一次選考審査会では、選考審査員が推挙した作家の推薦理由を述べ、更に全ての候補者の作品や活動及び推薦理由に関して意見交換し、慎重に審議した。その結果、文部科学大臣賞は7名、文部科学大臣新人賞は5名の候補者に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ作家の作品と業績について、積極的な意見交換と審議をした上で投票を行った。文部科学大臣賞は一回目の投票で3名に絞り、さらに、二回目の投票によって栗林隆氏と沢村澄子氏の2名が、また、文部科学大臣新人賞は一回の投票で中崎透氏が選出された。</p> <p>大臣賞の栗林氏はドクメンタ フィフティーンでの「元気炉」が深い思考と調査、旺盛な行動力の結晶であること、沢村氏は「宮沢賢治-沢村澄子 現象的書展」での言葉と対峙する真摯な姿勢が、ともに高く評価された。新人賞の中崎氏は個展「中崎透 フィクション・トラベラー」ほか旺盛で多彩な活動の成果が高く評価された。</p>
放送	<p>放送部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補として10名、文部科学大臣新人賞候補として11名の推薦があった。第一次選考審査会では、候補者の活動に関して多角的な議論が交わされ、文部科学大臣賞候補5名、文部科学大臣新人賞候補5名に絞った。</p> <p>第二次選考審査会では、第一次選考審査会で絞り込んだ候補者の作品の再視聴や、その業績について確認するなどして臨んだ各選考審査員から、改めて候補者を推挙してもらった。その結果、文部科学大臣賞候補には3名の名が挙がり、選考審査員に意見表明を求めたところ、全ての選考審査員の意見が一致する形で、脚本家の藤本有紀氏を文部科学大臣賞に決定した。候補者は異なるジャンルで専門性を持った仕事に携わっており、同じ尺度では評価し難いことを十分に認識した上で、氏の最近の業績、特に「カムカムエヴリバディ」での仕事を高く評価する声が多数挙がった。文部科学大臣賞新人賞候補には4名の名が挙がり、選考審査員の意見を確認した結果、最も多くの選考審査員から名前が挙がり、かつ、最終的に全ての選考審査員が支持する形で、関西テレビ放送プロデューサーの佐野亜裕美氏を文部科学大臣新人賞に決定した。氏の放送局間の垣根を越えた活躍ぶりに、放送現場の将来の在り方や可能性を感じるとの声も多く挙がるなど、プロデューサーとしてのセンスの良さを含め、高く評価された。</p>
大衆芸能	<p>大衆芸能部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者11名、文部科学大臣新人賞候補者16名の推薦があり、第一次選考審査会で文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名の候補者に絞り込んだ。</p> <p>文部科学大臣賞は浪曲、音曲、ロック、歌謡曲など何らかの形で「音楽」に携わりながら世界観を極めてきた実力者が勢揃い(ぞろ)い。それぞれの過去から近未来まで見据えた熱い議論が交わされた。結果、大病を克服し今また第二の円熟期を迎えている京山幸枝若氏を選出。持ち前の大衆性と技術によって上方浪曲の魅力を現代へと伝えるため孤軍奮闘する意欲的な活動が高く評価された。そしてもう一人、半世紀にわたりロック音楽家として、あるいはCMや映画、ゲームなどの音楽制作者として、幅広い分野で尖(せん)鋭的な活動を続け、シーンに多くの影響を与えてきた鈴木慶一氏も選ばれた。文部科学大臣新人賞は落語、講談、漫才、コントなど多彩な演芸ジャンルから推薦された候補者をめぐり議論。最終的に、何気ない日常風景をシニカルな視点に貫かれた脚本と卓抜した演技力で笑いへと昇華する三人組コントグループ、東京03が選出された。</p>

## 令和4年度(第73回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
芸術振興	<p>芸術振興部門は、文部科学大臣賞15名、文部科学大臣新人賞12名の候補者推薦があった。第一次選考審査会で文部科学大臣賞は4名、文部科学大臣新人賞は5名に絞られ、第二次選考審査会での討議となったわけだが、ここからが一苦労である。芸術振興部門は新しい領域や複数の部門にわたる活動を行っている者と要項で決められており、2名程度に絞られたとしても、その候補者を同じ土俵で比較検討することが難しいのである。そのような条件の中で、今回はプレイヤーやパフォーマー以外、つまり他部門では評価されにくいであろう方を選ぼうという考えは選考審査員で共有されていた。最終的に文部科学大臣賞は舞台芸術プロデューサーの唐津絵理氏に決定した。「愛知県芸術劇場×Dance Base Yokohama パフォーミングアーツ・セレクション2022」の成果が理由であるが、その元となった「Dance Base Yokohama」の活動も高く評価したい。また、文部科学大臣新人賞は映画館代表の平塚千穂子氏を選出した。ドキュメンタリー映画「こころの通訳者」の制作と、その中で描かれる聴覚障害者のための舞台手話通訳、音声ガイド制作などの地道な活動を評価したものである。受賞した2名には今後の更なる活躍を期待している。</p>
評論等	<p>評論等部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として17名、文部科学大臣新人賞として16名が推薦された。第一次選考審査会では、推薦書類の内容を踏まえて慎重に審議をした結果、文部科学大臣賞については7名、文部科学大臣新人賞については3名の候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、各候補の著作をめぐって踏み込んだ議論を交わした結果、文部科学大臣賞については中野正昭氏と岡塚章子氏が選出された。中野氏の「ローシー・オペラと浅草オペラ」は大正期の翻訳オペラ受容について、観客層からの視点を新たに設定して多彩な対象を考察し、画期的な成果をもたらした。岡塚氏の「帝国の写真師 小川一真」は明治期に写真師として文化財調査に協力し、写真雑誌の刊行など写真文化振興に貢献し、帝室技芸員にも任じられた小川の事跡を丁寧に跡付け、その全貌を明らかにした。文部科学大臣新人賞については、これまで多様に論じられてきた谷崎潤一郎と映画というテーマに正面から取り組み、独自の視点から鋭利な分析を加えた「谷崎潤一郎と映画の存在論」の佐藤未央子氏が選出された。</p>
メディア芸術	<p>メディア芸術部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補として11名、文部科学大臣新人賞候補として15名が推薦された。第一次選考審査会では、全ての候補者の推薦書類の内容を踏まえ、各専門分野の委員からの見解を十分に精査し、慎重に議論した結果、文部科学大臣賞は5名、文部科学大臣新人賞は8名に候補を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では作品の現代社会へ向けたメッセージ性や、表現方法など多様な側面から議論が行われた。また、メディア芸術部門では、アニメーション、マンガ、メディアアート等、専門性が異なる分野に文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞を各1名に絞らねばならないため、丁寧な議論が求められた。セカイ系の代表作家として位置付けられてきた新海誠氏だが、自身で原作から書き、ゼロからオリジナルのアニメーションをつくり続けてきたことも評価のポイントのひとつとなり、文部科学大臣賞に選出された。アイヌ民族を主人公に描き、難しいテーマに挑み「ゴールデンカムイ」を完結させた野田サトル氏が文部科学大臣新人賞に選出された。いずれの受賞者も文化的世界観のアップデートを作品によって行なった功績も大きいと考えられる。</p>